

---

# ウルトラマリン！

有馬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウルトラマリン！

### 【Nコード】

N2286D

### 【作者名】

有馬

### 【あらすじ】

廃部寸前の白根県立柳都高校水泳部。大会団体参加人数を割る事態に急遽助っ人として招集される主人公、汐見トキ。「競泳なんて幼い頃手ほどきを受けたくらいで無茶だよ」……ところがどっこい。結構泳げるじゃん。「よし決定、お前今日から部員」「！？」。男女混合でゆるゆる楽しく練習、発展しそうで全然しない部内恋愛、大会に向けてちょっと真剣に行きつつもやっぱりほのぼののコミディなお話。

## Scene : 0 フライ・イン

フライ・イン。

競泳を始めてしばらく経つけど、相変わらず飛び込む瞬間だけはちよつと怖い。

思った以上に高い所から水面へと、頭から飛び込まなければならぬから。

スタート台は足元からすれば、ほんの少しの段差。でも私の視線はそこからさらに155センチも上にある。

台の上に立ったとき、その高さには目がくらむ。自然と気後れる。

何度も体感しているのに、私の身体はなかなか慣れてくれない。

それでも、スタートのホイッスルが鳴ったら否応なしに私は台を蹴り、眼は2メートル下の水面へとダイブする。

浮遊。

恐怖。

少し後悔。

無重力。

ちよつとの間だけの、果てのない時間。

しかしやがては 身体は弧を描いて水の壁に突き刺さる。

瞬間。

衝撃。

イメージが破裂し、視界はどこまでも白くなる。

全身が水に染まる頃、私の中から余分な何もかもが消し去られる。もう何も迷わない。何も思わない。考えない。

それは私であつて、私ではない。私はたぶん私はもう、どこにもいない。ゴールするまで、私はお預けなのだ。

きつとそれは意志そのもの。

どこまでも透明で、無垢で、無邪気で、健気に水の先を目指す。フライ・インの衝撃は私の殻を破り、意志を産み落とす。

終わるまで水中を駆け抜ける意志。

終わらないならば、きつと海だって越えていけるほどの意志。それが好きだった。

私はそれに会いに、今日も台の上に立つ。

S c e n e : 0    フライ・イン（後書き）

読んでいただき本当にありがとうございます。色々とベタベタなラ  
イトノベルになるよう頑張ります。宜しく願いします。

## Scene：1大型連休の翌日の話（前）

白根県立柳都高校には学食がない。

その事実は何もこの私、汐見トキが今更ため息をつくまでもなく、柳都高校に通う者なら誰でも憂えることだった。近くにコンビニが無いわけではないけど、短い昼休みの中で買いに出るのは困難の極み。結局殆どの学生は早朝に眠い目をこすりつつ、遅刻寸前でコンビニ弁当を買うしかないのだ。親にありがたく弁当を作ってもらえるのは少数派で、しかも飢えたゾンビと化したクラスメートの餌食になりやすい。もしこれから柳都高校に入学する後輩がいたら、まず「親御さんの弁当は隠れて食べることを教えなければならぬ。本当にバイオハザードだからね。」

とはいっても、昼休みの食料調達方法は一応他にもある。例えば今私がいるのはパンと飲み物しか売っていない購買部だ。ここはこの高校にもある通り、典型的な戦場になっている。御飯や麺類が食べたい人にはオススメ出来ないし、なかなか人気商品は手に入らないけど腹は膨れる。

こんな感じで、とりあえず柳都高校の昼休みはコンビニ・弁当・パンに大別されることになる。たまに例外としてカップ麺を持ち込んでどこからお湯をかつぱったり、朝マックをテイクアウトして冷めてるはずのそれをどこかで温め直して食べる馬鹿もいる。

まして市の中心街にダッシュで美味しいもの喰いに外食に行くなんてのは猛者中の猛者だ。

勇者といっても過言じゃない。

ま、これは伝え聞いた話だから、多分数年前の伝説なだけだとは思う。

そんなことを考えながら購買部の人波に揉まれている。  
昼休みが半分過ぎようとしていた。

もうすぐタイムサービスが始まる。

喰い足りなくてオカワリを求めたり、金欠気味の学生がケモノと化す時間。

それを見計らって、混雑の中に飢えたハイエナが群がり始める。

私もその中に紛れ込み、肉食獣の如く人混みの向こうの獲物（＝パン）に目を凝らした。

今日は日直の関係で、この時間に来ざるを得なかった。

理論上はタイムサービス前に多少の高い金を出せば売れ残りの中でも良い物を買える訳だけど、タイムサービスという新たな戦場の中で勝ち取ることに快楽を見いだしているケモノにとってそれはフライングに等しい行為。以前サービス開始前にめばしい獲物を根こそぎ買ってしまった男子生徒がフクロ叩きにされているのを見て、私はルールを遵守することに決めた。

集団心理の類が何かまではわからないが、ここには確かなルールが存在する。フライングはもちろん、カルテルもトラストもコンツエルンも禁止。学年も性別も関係なし。実力主義の中にフェアプレーの精神がある。……ここに居るときは、たぶん私は女子じゃない。学ランを窮屈そうに着こなす筋骨隆々の運動部連中には叶わないけど、それ以外になら勝てる自身があった。男友達に泣きついて買って貰っていた1年生前期の頃とは違うのだ。

見た限りでは、今日は中々良い物が残っていそうだった。割と穴なクリームパンが目測で5、6個、ジャムパン系も多い。1個とはいえ焼きそばパンがあるなんて奇跡だ。流石にこれは先に誰かに買われそうではある。買う物の優先順位をつけ、釣り銭がないように小銭を握りしめる。

とにかくこんなに売れ残ってるなんて、今日は実にツイている。さらに良いことに、前をふさぐ運動部と思しき男子は少ない。いける。これは絶対いける！

飢えた各々が昼休みの半分、12時45分をカウントダウンする。

携帯でわざわざ時報を聞いてる人もいる。そこまでするかと入学したての頃は思ってたけど、柳都高校に通っている学生からしたらいつものことだった。

時計の針を気にして、混雑しているに関わらず購買部前が沈黙に包まれる。

嵐の前の静けさだった。

時刻は12時44分40秒……50秒……

5……4……3……2……1……

「おいーつすとき、探したでー」

空気を完全に無視した関西弁が背後から聞こえ、がっちりと首根っこを捕まれた。

「みゃッ!？」

0……

「それじゃ今からタイムサービス始めますよー全品半額」

購買のおばちゃんの声聞き終わらないうちにケモノというケモノが吼えて獲物に飛びかかった!!

しまった! 今ので完全に出遅れたッ!!

1ナノセカントも待てず駆け出したいのに首根っこが動かない!

ああ! 待って!

「クリーム! ジャム! 焼きそば! ちょっと! 離して!!」

「いやいや落ち着きい、トキ」

そう言って私の邪魔をする張本人は私の前にマツクの紙袋を突きつけた。

「これやるから」

「……へ?」



購買のパンに対する恐ろしい程の欲望は、それを遙かに上回ることで馳走の前に一瞬にして霧散した。

## 價值基準

マック<<<<<<<<<<<<購買パン

「もらって……いいの？」

あまりの唐突な展開に、頭がうまくついていけない。

「ええでええで。そのために買ってきたんやし」

私の幼なじみにして昼休みに湯気の立つカップ麺をすすったりアツアツの朝マツクを頬張ったりかつて購買前の生存競争に勝てなかった私のためにパンを買ってきてくれたりした「馬鹿」、小針新こはりあらたがそこにいた。もう一つ同じマツクの紙袋を眼前に持ち上げる。

「昼食まだなんやろ？ 一緒にどうや？」

この時、不覚なことに私はまだこの男の策略に気付いていなかった……

Scene: 2 大型連休の翌日の話（中）

「昼食まだなんやろ？  
一緒にどや？」

私の目は新のマツクの袋から離そうとしても離せなかった。普段の学校食生活では決してお目にかかれないゼイタク中のゼイタク。中からは仄かに油っぽい香りが漂ってきている。

2つの袋を蛇の鎌首みたいにゆらゆらさせて、新はさりげなく私をエスコートしつつ殺人的な人混みから遠ざけていった。むむ、なかなかやるな。

ふらふらと袋についていく私を眺める新はニンマリと笑う。

「して、返事は？」

「その前に聞いておくけど、メニューは」完全に釣られた姿勢ながら一応尋ねる。

「ビッグマックにフィレオフィッシュにてりやきチキンにダブルチーズバーガー、フライドポテトは勿論！サイズを2つ、マックシェイクのバナラとストロベリー。デザートにマックフルーリーのキットカットとオレオクッキー。この中から好きなものを選んでな。ちなみにさっき買ってきたから出来たてやで」

「合格！」びっ！と親指を立てる。さすが新、私の好みをよくわかってる。

「ありがたくご馳走になります！」

「よっしゃ、ほならどーで喰うか……」

『こおおおおばあああ  
ああらいいいいいいい  
いい！！！！』

言いかけたところで、地獄の底から天を衝く怒声が響き渡った。しかもエコーがかかっている。廊下の向こうからフルアクセルで突進するタイガー戦車のような教師が1台……じゃなかった、1人。



てまでマックを買いに行ってくれたんだね。

しかもかつて誰もサボることができなかった銀山の数学だったのに。

腹ペコな私のために

本当にありがとう。新のこと、一生忘れない。

新の逃げた方向に軽く手を合わせると、今度はマックの袋に対してしっかりと手を合わせた。

「では、ありがたく頂きます」

教室に戻ると襲われるので、適当に探して見つけた人気のない階段に腰を下ろして袋を開けた。極上の油の香りに脳がくらくらする。マックシェイクにぶすつとストローを差し込み、ずぞぞぞと一息に吸い尽くしたところにはどっかの馬鹿のことは頭のどこにもなかった。お腹が減っていたのもあって、次々にバーガーを取り出しては頬張り、取り出しては食った。

美味い。

やはりマックはいい。

ダイエットをしなきゃいけない女子高生としては天敵だけど、でもふとした時に食べたくなる人工的な味。

クセになるジャンクフードな味わい。食品加工の闇、健康にちっとも良くないという事実が今かぶりついたビッグマックを一味もふた味もおいしくする。正直たまらない。

バーガーの合間にポテトをつまむ。熱々でパリッとしたポテト。

油がにじんでパリパリ感がなくなると旨みが半減するから、早めに食べなくてはならない。ああ、マックフルーリーを溶かすなんて愚行も犯すわけには行かない。これは忙しい。

何か大事なことを忘れているような気がしたけど、嬉しい忙しさに頭を支配された私は食欲のなすままに喰い続けた。

「こんなところにおったか。ただいま、今度ばかりは死ぬかと思うたで」

山のようにあつたポテトを平らげる。最後までパリパリ感が残つて良かった。

「ありや、ワイの分はいつたい……って？」

バーガーの最後の一口をシェイクで流し込む。平行して食べていたマックフルーリーもあと少しだった。嗚呼名残惜しきこと限りなし。

「あれで2人分やったのに……全部喰つたんやな、トキ」  
本当に名残惜しい、これが最後の一口……。

『おい、トキ』

地の底から噴き上がったような声がした。エコーかかっている。

「！？」

がばつと顔を上げると、何時の間に戻ってきたのかニンマリと嫌らしい笑みを浮かべた新と目があつた。でも目は全然笑ってなくて、激しく気味の悪い顔だった。

「ちよつと！ 何で生きてんの！？」

「勝手に殺すなや！ 銀山の奴を命からがらまいてたんや！ で、ワイの分は？」

……………。

沈黙。

気が付けばハンバーガーの袋もポテトの箱も全て空。シェイクも然り。片方のマックフルーリーもまた既に全滅。手にした最後のマックフルーリーには僅かにあと一口がプラスチックのスプーンに乗っている。

「はい、あーん」

「あーん んむ。うん、たまにはアイスもええな。で、ワイの分は？」

私の中で何かが激しく警鐘を鳴らしていた。努めて甘えた声を出してみる。

「ね、おいしかった？」

「で、ワイの分は？」

タイムリミット。もう茶番に付き合ってくれそうもなかった。

ヤバイ。

猛烈にヤバイ。

「ごめんなさい！」

新が呆れて大きく息を吐いた。

「ワイの言ったこと覚えてないんか？『ワイの分は後で回収するからとっておいてやー』」

「……あ」

そういえばそんなこと言われたような気がする。

「ごめん！ お腹減ってて、お代なら払」

「もうええで、なくなつたもんはしゃあない。お代もいい。半分は食べさせるはずやったしな。問題は時間や時間。鬼教師銀山の2限サボってまでマックに特攻したワイの苦勞を一体どうしてくれる。

マックまでチャリでここから片道30分はかかるんやで」

「いや、本当にごめん。この通りです」即刻、土下座。

「これはどーしたもんやろな」

「すみませんでした」床に頭をすりすり。

「ほんとーにどーしたもんやろな」

新、すごい棒読み。この「どうかお慈悲をお代官様状態」、早く終わらないかな。

「新様ごめんなさい何でもします……ていうかそもそも私をマックで釣って頼むことがあったんじゃないの！？ 食べた以上付き合うわよー！」

「さすがトキさん！ そうこなくっちゃ」

「どうせ私が今日日直で昼休みに泣く泣く売れ残りの購買パンを買いうしかなくて、とてつもなくお腹空かしてて持ってきたマック全部

食べちゃうことも計算済みなんでしょ!？」

「いや、そこまでは……まさか全部平らげられることまでは読めなかったわ。けっこう喰いしんぼさんやったんやなトキは」

「悪かったわね」

「別に悪いとは言っていないでー」

「……で、用は何なの？」

私は一息ついて態度を素に戻した。その様子を見て、新もまじめな表情になる。

「ちょおーっと付き合ってくれへんかな？ 放課後、水泳部まで」  
新の入ってる水泳部に？

「よくわからないけど、わかった。行くわ」

「助かるわ。あともう一つ頼みが」

「何？」

「腹が減って大変なんや。購買のパンはもうとつくに売り切れとるし。胃の中のマツクを分けてくれへんか？ こう、鳥の親子みたいな感じで」

蹴った。

### Scene : 3 大型連休の翌日の話（後）

放課後になつて私はプールに行くことにした。

教務棟を抜け、体育館への連絡通路の途中の「プール」と書かれた無骨な鉄扉を開けると、日差しが全身を覆った。

日本海側の白根県にはわりと珍しい、雲一つない快晴。

まだ春だというのに今日はやたらと暑かった。じつとりと汗がわいてくる。こんな日に泳ぐ水泳部を少し羨ましく思いつつプールサイドに足を運んだ。

なぜか鬼教師の銀山が足を組んで瞑想していた。

「!？」

何かの仏像にそっくりだった。

一瞬にしてわいていた汗が引く。

戸惑い一つもとりあえずすべてを見なかったことにして引き返した。

『待たれよ、汐見トキ』

……引き返せなかった。

先生の厳かな一言は私の全身をフリーズさせた。

眼を閉じているのになんで私がわかったのかはもうこの際どうでもいいや。

「あの、どうしてプールにいらっしゃるのですか銀山先生」

首だけを何とか動かしてそれとなく尋ねてみる。

『我は今年から水泳部顧問だ』

「あ、そうだったんですか」

内心は全然「そうだったんですか」じゃ済まなかった。ここの水泳部、よりによって顧問は銀山ですか。私もう逃げていいですか。しかしこんな顧問の下でよく新は耐えられたものだ。



「勝手に入ってすみません。私、新　小針君に放課後水泳部に来るように言われてまして」

『知っている。小針は今週、教務棟東階段の清掃担当のはずだ。もつともサボっていないければの話だが。小針が来るまで、ゆっくりとくつろがれよ』

プールサイドでくつろぐもなにもなかったけど、ひとまず銀山から三メートル位離れたところに腰を下ろした。付かず離れずのギリギリなポジション。離れすぎると違和感を持たれるだろうし、だからといって近づくなんて怖すぎて出来ない。

『……………』

「……………」

お互いに沈黙。話すことがない。第一、銀山は瞑想中だった。

『……………』

「……………」

『……昼のマクドナルドは美味かったか？』

「へ？」

唐突に変なことを訊かれた。しばらく固まってから、返事を搾り出す。

「……大変おいしく頂きました。行動はアレでしたが、小針君には感謝しています」

『そうか』

静かで落ち着いた声音だった。

普段新に怒鳴り散らす銀山の印象とだいぶ違う、泰然とした雰囲気。これが銀山の素なのだろうか。

「そつえば、小針君の処置はどうなるんです？」

『誠に残念ながら、今回に関しては職員会議の結果不問ということになった』

やはり銀山は銀山だった。

途端、憤怒のオーラが立ち上る。思い出し怒りをしているらしい。『あやつめ、成績トップを盾にとって我以外の教師を誑かしおって』

実は小針は1年生の頃から学年の成績で常に1位をキープしている秀才だったりする。卒業生の殆どが大学進学し、旧帝大や早慶・東大にも現役合格が多いこの進学校の中では凄いことだと思う。少しぐらいなら大目に見てもらってもいいだろう。生活指導の銀山としては気に喰わないだろうけど。

『小針新、覚えておれ……』

憤怒のオーラは銀山の周囲数メートルを焦土にしつつあった。とんでもなく熱い。

正直な話、一刻も早く逃げたい。

でも怖くて身体が動かない。

というか、そろそろ誰か来て欲しい。

いい加減隣の閻魔大王の沈黙の炎に焼かれそうだった。

その時、

ぱしゃり

どこからか清廉な水の音がした。ここからでは見えないが、誰かがシャワーを浴びているらしい。私の祈りが天に通じたのか、銀山は怒りのオーラを収めてくれた。助かった。

ぱしゃぱしゃと、水が石畳を叩く音が聞こえる。1滴1滴を聴くたびに、私の感覚が研ぎ澄まされていくような心地よさがあった。やがてシャワーの音が止んだ数瞬の後、彼女が姿を現した。

一瞬、空気が静まった。そんな気がした。

肩口まで伸びた金髪から水をしたたかせ、淀みのない足どりでプールに向かって歩みを進める。途中でこちらに顔を向け、銀山に向かって一礼。芯の通った背筋と、洗練された身のこなし。おまけに

見惚れてしまいそうになるほどの美人だった。

スタート台の前で立ち止まり、彼女は準備運動を始める。一部始終が舞踊の所作であるかのように、微塵の迷いも間断もない動作だ。髪を手早く纏め上げキャップを被り、ゴーグルをピタリとつけた彼女はおりむろにスタート台に上った。

右足は前に、左足は後ろに。両の手はスタート台の前のへりを掴む。ちょうど陸上のクラウチングスタートのような姿勢だ。そのまま重心を限界まで後ろにかけ、全身の力を溜める。

やがて彼女が水の先を見据えた。来る、と思った。

フライ・イン。

全身をバネにして、高く高く弧を描く。長い一瞬。

水面に吸い込まれるように、ほぼ直角での着水。音が殆ど立たない。

彼女は長い潜水を経て、滑るような速さで水を掻き始めた。1つも無駄の無い動きで、水の先を目指している。

水の中で飛んでいるみたい。心からそう思った。

「咲花さきかの奴、もうやつとんのか」

気がつけばそばに新が来ていた。着替えを済ませており、競泳水着に身を包んでいる。

「すごいね、あの子」

「まあ咲花は水泳部の中でも別格やからな。そうだ、来てもらっておきに」

「あ、うん」

「よし！ んじゃ早速で悪いんやけど、今からあの咲花と勝負してもらおうで」

「はあ、勝負ねえ……」

え？

勝負？

空気が凍った。間違いなく凍った。

今、何と？

「シヨウブって、なに？」

「そんな自分はいかにも関係ありませんみたいな顔されても困るでええか、ここにトキを呼んだのは咲花と水泳で勝負させるためや。女子部員に水着とタオル用意してもらたし。何や？ 何か言いたいことでもあるんか？」

.....。

「.....トキ？」

.....。

「おい」

.....。

「ちよつぷ」

「ごん、と頭頂に痛みが走った。

「ちよつと、何するのよ！」

「いい加減現実逃避はやめや。来た以上は泳いでって貰うで」

「そんなこと言っても競泳自体幼い頃やってたぐらいだし、勝負なんて無茶苦茶な」

「実力はどうでもいいんや。要はとにかく本気で泳げいうだけやから」

「いや、でもさ.....余りにも唐突って言うか」

「マクドナルド」

「あんまりな気がするって言いますか」

「マクドナルド」

「.....すいませんでした。やりますからその銀山みたいな形相やめ

てお願いだから」

「わかればよろしい」

そういうことになった。

その日、5月6日。

1週間近い大型連休の翌日。

この日を境に私の平凡な学校生活は大きな変貌を遂げることになるとは、しかも喰い物の恨みからそうなるとは思ってもよらなかった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2286d/>

---

ウルトラマリン！

2010年10月9日00時12分発行